

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593417

研究課題名(和文) 注意欠陥多動性障害児の母親における虐待発生のメカニズム

研究課題名(英文) the mechanisms of the occurrence of child abuse in the mothers of children with ADHD

研究代表者

真野 祥子 (MANO, SHOKO)

摂南大学・看護学部・准教授

研究者番号：90347625

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ADHD児の母親の愛着感の側面から虐待発生のメカニズムを明らかにすることである。計33項目の愛着尺度を作成した。ADHD児の母親は、「実際の愛着感」と「理想とする愛着感」に乖離があることが考えられ、同じ質問項目を用いて現実の愛着感と理想の愛着感を問うた。因子分析(主因子法・プロマックス回転)の結果、「対児感情」「子どもの理解」「子どもに対する態度」の3因子を抽出した。現実の愛着感は理想より有意に低く、「理想-現実」の値が大きく乖離している母親が多く存在していることが伺えた。否定的な感情が肯定的な感情より高いほど乖離が大きくなり、虐待が発生する可能性が高くなることが考えられた。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to explore the mechanisms involved in the occurrence of child abuse in the mothers of children with ADHD. A total of 33 question items related to the sense of attachment were created based on previous studies. We requested mothers to respond to these question items in regard to the sense of attachment they currently have toward their children as well as their ideal sense of attachment. The results of exploratory factor analysis of actual attachment suggested that the interpretation of the 3-factor structure of "emotions toward child", "understanding of child", and "attitudes toward child" was valid. A significant difference between the actual and ideal sense of attachment was observed and there are many mothers who have the higher divergence between the actual and ideal sense of attachment. We guessed that the higher negative feeling toward the children is, the higher the divergence is and may be at a higher risk of happening child abuse.

研究分野：精神看護学

キーワード：注意欠陥多動性障害

1. 研究開始当初の背景

注意欠陥多動性障害(以下、ADHDと略)児の母親は、健常児の母親と比較して育児ストレスが有意に高く、子どもの行動特徴が顕著なほど子どもへの愛着感が減少し、その結果、厳格で非難的な養育態度となることが示されている。「育てにくさ」は虐待を受けやすいリスクファクターであり、虐待やネグレクトの問題の背景には、親から子どもへの愛着感の欠如が関与していると言われているが、実際、AD/HD児は虐待を受けるリスクが高い。虐待は、子どもの情緒面や行動面、身体発育に深刻な影響を及ぼし、その影響は非行や、成人した後もうつ病などの精神疾患のリスクを高めてしまう。よって、母子の不適應行動を未然に防ぐためにも、健全な親子関係を築くことができるよう支援する必要がある。

2. 研究の目的

ADHD児の母親の愛着感の因子構造を明らかにし、愛着感の側面から虐待発生メカニズムを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象および調査方法

研究協力者である医師から紹介を受け、DSM-IVに基づきADHDと診断された6~12歳の学童の母親(ADHD群)を対象とした。比較対照としての対照群は、通常学級に所属する学童の母親とした。

対象者には書面を用いて研究の目的、方法、意義、いつでも同意を取り消すことができ、同意の取消によって不利益を被らないことを説明した上で同意書が得られた者のみを対象とした。この際、対象者が自由に参加の意思決定ができるよう配慮した。回答した無記名式の質問紙は、返信用封筒を同封し郵送にて回収した。

(2) 調査内容

愛着感に関する質問紙

先行研究を参考に、学童の母親に特化した合計35項目の愛着尺度の項目を作成した。

筆者の先行研究の結果から、ADHD児の母親は子どもの問題行動に直面すると憎らしいと思ったり、厳しく叱ったりするが、そうでない状況にある場合はかわいいと感じており、「実際の愛着感」と「理想とする愛着感」に乖離があることが考えられた。そこで同じ質問項目を用いて、「現実の愛着感」と「理想の愛着感」を問うた。

プレテストを実施し、回答の様子から質問文の解釈が紛らわしいと思われた2項目を削除し、33項目を採用した。

回答は、「全くそのとおり」5点から「全く違う」1点の5件法で回答を求めた。

属性調査用紙

ADHD群と対照群で共通する質問項目とし

て、子どもについては性別と年齢、母親については年齢、就労の有無、家族形態(核家族か拡大家族か)について取り上げ質問紙を作成した。ADHD群については、内服薬の有無について取り上げた。

(3) 統計解析

ADHD群と対照群の属性の比較について、t検定、 χ^2 検定を用いた。

ADHD群における現実の愛着感の合計33の質問項目については、天井効果を認めた項目を分析から削除した。次に、その愛着感のデータを主因子法およびプロマックス回転による因子分析を行った。抽出した因子ごとに2群の現実と理想の得点を算出し、現実と理想の愛着感の因子ごとの得点を独立した2群間で比較するため、Mann-WhitneyのU検定を行った。また、同一群で現実と理想の3因子の値に有意な差があるかどうかを検定するため、Wilcoxonの符号付順位和検定を行った。尺度の内的整合性に関しては、下位尺度ごとにCronbachの信頼性係数を求めた。

2群の現実と理想の因子ごとの得点の差についてヒストグラムを作成し、愛着感の中でもどのような因子が理想と現実のギャップを生じさせているのか、一元配置分散分析を用いて群内比較した。

4. 研究成果

(1) ADHD児の母親における愛着感について
ADHD群は、男児100名、女児15名、平均年齢は 9.4 ± 1.9 歳、母親の平均年齢 40.4 ± 4.1 歳であった。対照群は、男児92名、女児23名、平均年齢 9.5 ± 2.0 歳、母親の年齢 40.3 ± 3.9 歳であった。2群における属性の各項目について有意差は認められなかった。

ADHD群の現実の愛着感の質問文合計33項目について、各項目の平均値と標準偏差を算出し、平均値+標準偏差の値が5以上であった合計11項目を削除した。残った22項目に対して因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い、因子負荷量0.40以下の項目、複数の因子に高い因子負荷量を示した4項目を除き、再度同様の因子分析を行い、最終的に3因子を抽出した。以下に各因子の内容と命名について説明する。

第1因子は、「子どもと一緒にいるとうれしい」「子どもと一緒に過ごすことを楽しみにしている」など、合計6項目で構成されていた。この因子は、母親が日頃、子どもと接する際の子どもへの感情が含まれているため、「対児感情」と命名した。ADHD児の症状は、母親のネガティブな感情を引き出し、ポジティブな感情はほとんどないと評価していることが明らかにされている。よってADHDの症状を呈している子どもと交流することで第1因子を低下させている可能性が考えられる。

第2因子は、「子どもの性格が分かる」「子どもの出すサイン(合図)を理解できる」な

ど、合計6項目で構成されていた。この因子は、親として子どもの気持ちや行動に対する理解に関する因子であるため、「子どもの理解」と命名した。子どもの性格や子どもの出すサインを理解することは、ADHDに関する基本知識や子どもへの対処法といった障害理解も含まれることが考えられる。ADHD児の母親は、子どもが診断を受けることで問題行動の原因、対処法が分かり子どもに対する愛着感を高められるようになることが示唆されている(眞野,2009)。本研究でも子どもの理解という側面は、障害の理解も含まれ、母親から子どもへの愛着感の程度に影響を及ぼしていることが考えられる。

第3因子は、「子どものためなら喜んで何でもする」「私と子どもの間の関係は好ましいものである」など、合計6項目で構成されていた。この因子は、子どもを養育育てるための養育行動や認識に関する因子であるため、「子どもに対する態度」と命名した。子どもや養育に対するとらえ方は、子どものほめ方や叱り方、関わり方といった養育態度の変化にあらわれる(松岡,2011)。ADHD児の母親は、健常児の母親と比較して、子どもの育てにくさや対応の困難さを感じやすく、厳しく叱責するような不適切な養育態度をとると言われている(松岡,2011)。本研究の結果は、親としての態度の低下の一因として、ADHD児の行動特徴の影響が考えられる。

尺度の信頼性を求めたところ、クロンバックの係数は「対児感情」因子が0.90、「子どもの理解」因子が0.80、「子どもに対する態度」が0.80であり、尺度の信頼性が確認できた。なお、これら3つの因子の全分散に対する累積寄与率は55.29%であった。

(2) 現実と理想の各因子得点の群間比較と群内比較

2群の現実と理想の愛着感について、因子ごとに合計得点を求め、Mann-Whitney U検定を行った。結果は、現実の愛着感3因子は2群間で有意な差を認め、対照群の方がADHD群より有意に得点が高かったが、理想の愛着感3因子に関しては2群間で有意差は認めなかった。また、それぞれの群において、3因子ごとの現実と理想の値に有意な差があるかどうかWilcoxon符号検定を用いて検討した結果、2群ともに現実と理想の愛着感3因子間で有意差を認めた。

健常乳児を対象にした研究においても、母親は子どもに対して強い肯定的感情を持ちながら、他方これとは逆の否定的な感情を持つ、アンビバレントな心理状況であることが明らかにされている。本研究でも、2群とも現実と理想の愛着感に有意差を認めた。本当は子どもに対してポジティブな感情を抱きにくい状態であるが、そうありたいと思っ

る母親が多く存在していることが明らかとなった。子どもに対するアンビバレントな感情は、体罰などの子どもに対する危害との関連が指摘されている(Kent,1997)。否定的な感情が肯定的な感情より高いほど乖離が大きくなり、虐待が発生する可能性が高くなることが考えられる。

表1 ADHD群と対照群の因子ごとの得点の中央値

	感情	理解	態度
ADHD群	現実 22 (19-25)	24 (21-26)	22 (19-25)
	理想 29 (25-30)	29 (26-30)	28 (26-30)
対照群	現実 26 (24-29)	24 (23-27)	24 (22-27)
	理想 30 (26-30)	29 (27-30)	28 (25-30)

中央値(四分位範囲)

(3) 2群における3因子の「理想-現実」のヒストグラムと群内比較

2群における現実と理想の因子ごとの得点の差についてヒストグラムを作成した(図1A~C)。その結果、ADHD群の方が右に歪んだ分布を示しており、得点差が多い群が存在していることが伺えた。

2群における3因子の「理想-現実」の値の群内比較のため、一元配置分散分析を行った。結果は、ADHD群では対児感情と子どもに対する態度が子どもの理解より有意に高かった。これに対し、対照群では子どもの理解と子どもに対する態度が対児感情より有意に高かった。

ADHD児の母親が感じる無能、悲しさ、恥、放棄、不安のようなネガティブな情動反応は、温かさに欠ける養育態度をもたらす。よって対児感情と子どもに対する態度の2因子は乖離が大きくなっているのかもしれない。対児感情と子どもに対する態度は、ADHDの行動特徴に影響を受けやすいことが考えられる。また、本研究のADHD群の被験者は、受診に至った母親であり、診断をうけた子どもの母親であることから、子どものいわゆる問題行動がADHDのせいであることやその対処法の理解が進んでいることが考えられる。よって子どもに対する理解の現実と理想の乖離は大きくはないのかもしれない。

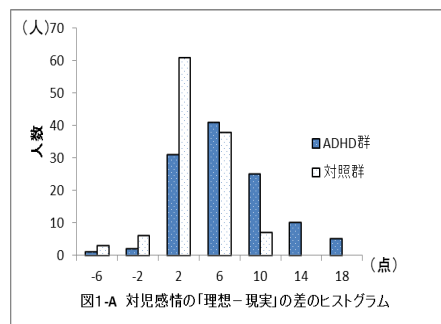
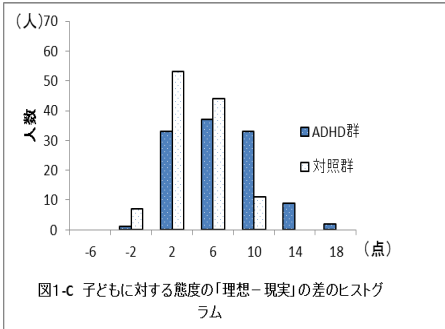
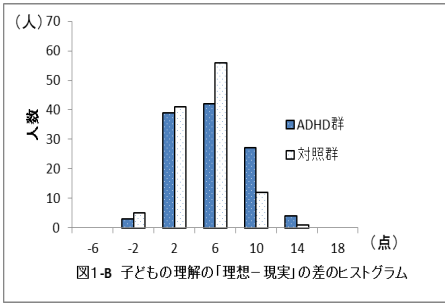


図1-A 対児感情の「理想-現実」の差のヒストグラム



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

真野祥子、宇野宏幸、堀内史枝、高宮静男
 「注意欠陥多動性障害児の母親における子どもへの愛着感」第54回日本児童青年精神医学学会総会 平成25年10月10日～12日(札幌)

6. 研究組織

(1)研究代表者

真野 祥子 (MANO, Shoko)
 摂南大学・看護学部・准教授
 研究者番号：90347625